Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

045

子どもの「けんか」に対する保育者のかかわり方　２歳～５歳

山田　スエ
三輪保育園

【目的】

当園では、「親業訓練協会」が提唱する人間関係の絆をつくる方法、『聞く』『話す』『対立を解く』を使って日常の保育を展開している。子どもの「けんか」は、些細な対立から始まると日頃観察しているので、今回は、子ども達に欲求の対立が起きた時、子ども達が自分で対立を解決出来る様に保育者がどの様に関わっているかを、自然観察をして、立証できるかを試みた。

『対立を解く』方法とは以下の６段階である。

①問題をはっきりさせる
②可能な解決策を出す
③解決策を評価する
④最善の解決策を決定する
⑤解決策を実行する方法を決める
⑥解決策がどれだけ問題を解決したか評価する

【方法】

２歳から５歳児、２６名同室、自由遊びの時間中に子どもが対立した行動を起こした時、保育者が子どもにどのように言葉かけをしているか、それによって子どもの行動が変化したかを、観察者２名が記録をとる。よく聞き取れなかった言葉は後で保育者に確かめた。

午前　４５～６０分間、３回（平成１２年１月）
午後　　〃　　１回　　〃

【結果】

自由遊びの時間中に観察したため、子ども達が自由に遊びのコーナーを作り遊んでいる時間帯では、目につく対立は起こってなく、個々に遊び込んでいる。

遊びのコーナーとしては、毎回、５～６箇所のコーナーに分かれ３人から５人位のグループで遊んでいる。遊びの種類としては、ままごと、人形ごっこ、パズル、ブロック、絵本、大型積み木、絵描き制作等で日によって遊ぶ場所は異なっている。

○対立が起こる場面とは
・保育者がリードして組み立てた活動
・新しい遊具が入った場面

実例Ⅰ

・ジェットコースターを作って遊ぶ場面

Ⅰ―a

保育室に備え付けの工作の本を見て、ビー玉を転がすジェットコースターを作って遊ぼうということになり、保育者と一緒に工作用紙を切って組み立てていった。その間は保育者の言葉に従って作っていったので、対立はなかったが、いよいよビー玉を子ども達に配り転がし始めると先を競って玉を転がそうとするので、対立が始まった。

U児（４歳男子）ビー玉ない、僕にもちょうだい。
T「いっぱい出してあるよ」〔状況説明〕
U（落ちた玉のたまり場からビー玉を自分で探して持ってきた。）

Ⅰ―b

M児（４歳女児）「これ私のビー玉、黄色の。」と（相手）N児（４歳ダウン症児）が握っている指をこじ開けようとする。
T「Mちゃん、黄色のビー玉欲しいの。」〔能動的な聞き方〕
M児「うん。」
T　N児に「Mちゃん、黄色のビー玉欲しいんだって。」〔Mちゃんの気持ちを伝える〕
N児「これ上げる。」と手の平を広げる。（N児は黄色にこだわってなかった様子）
M児「ありがとう。」
N児「ありがとう。」

Ⅰ―c

U児（４歳男児）「ビー玉ない。」
その時ビー玉が５～６個転がってくる。（K児５歳男児がまとめて転がした様子）
T「誰かがいっぱい持っているんだ。Uちゃんが欲しいといっているよ。」〔U児の気持ちを伝える〕
K児（５歳男児）「いいよ、貸してあげる。」とビー玉を渡す。
U児「ありがとう。」と転がしはじめる。

実例Ⅱ

おもちゃの図書館に全員で行き遊んだ時
・特製のコリントゲームで遊ぶ場面
（５歳児２名がコリントゲームを交代でやっていた）
H児（２歳男児）〔転がってくる玉を黙って取る〕

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

S児（5歳男児）やめろ！〔命令〕
H児　（玉を持ったまま離さない）〔無言の抵抗〕
T　（H児に）これ（玉をさして）を取るとSちゃんがコリントゲームが出来なくて困るから『やめろ』といったのよ。〔S児の気持ちを伝え、場面説明をする〕
H児（手を離して玉を戻した）
Y児（3歳男児）「僕もやりたい。」とやってくる。
T「入れてといってみたら。」
Y児　「うん、僕もやりたい。」〔わたしメーセージ〕
S児　「やりたいの。」とY児にいって、玉の色を選ばせ、玉入れを手伝わせて、突き手を引っ張る所まで教え一緒に遊んでいた。
H児（再び玉を取ろうとした）
S児　「玉取らないで。」〔困る事をはっきりいう〕
H児　（取らなかった）

実例Ⅲ

・おやつの時間の後、保育室の設定を変える間面白がって叫く子どもに対して、「やめて」と大部分の子どもが言える。
I児（2歳発達遅滞児）片隅に座っている。そこへO児（5歳男児ADHD傾向児）がやってきて、I児の額を爪はじきしいている。I児は泣きそうになって動けない。
T（O児にむかって）「Iちゃん泣きそうな顔している。痛いって困っているよ。」〔気持ちを伝える〕
O児　「うん、わかった。　ごめんなさい。」
T　（それから？）
O児　「もうやりません。」
と離れていった。

実例Ⅳ

・保育者が見せたパネルシアターの後、自由にピースを使って子ども達が遊んでいた。
F児（3歳女児）大声で泣く。「R児（5歳女児）がだまって取っていった。」
R児「『貸して。』ていったら『いいよ。』といったじゃない。」
F児「私、言わない。」
T「先生は見てなかったのでよく分からない。二人ともこれで遊びたかったんでしょう。どういうことだったのかもう一度やってみて。」（再現させるが、一枚しかないピースを巡って二人の言い分は、食い違っていて分からない。F児は一貫しているのに対し、R児は二転三転する）
T「見てないので、よく分からないのだけど、Fちゃんが『いいよ』といったのだったら泣いてないと思う。」
R児（黙ってその場を立ち去る）

【考察】

1）　実例Ⅰ～Ⅳで共通したTのかかわり方は、困った子どもの気持ちを能動的に受け止め、相手に伝えている。その結果、困らせた子どもの気持ちが解り、自分の行動を自ら変えている。

2）『対立を解く』方法 ①問題をはっきりさせる
この段階で、保育者が子ども達の気持ちを伝える事で子ども自身が自分を理解出来、次ぎの行動を自ら変えていっていることが解る。もし保育者が、「ビー玉がない。」といってきた子どもに「自分で探しなさい。」人が持っているビー玉を取ろうとする子どもに「先に持っているのを取ってはダメ。」「命令」する子どもに、「小さい子どもだから貸して上げなさい。」小さい子どもを爪はじきする子に「何をするのよ。泣かしてはダメ」というように、保育者が子ども達が対立した時、常に「命令」「指示」「説教「解決策を提案」していたら、子ども達は自分で考え行動する事が出来なかったのではないかと思う。むしろ保育者に反発したかもしれない。保育者のかかわり方で、双方の対立した問題がはきりした事で、②～⑥の段階へすすむ事はなかった。2歳～5歳児の「けんか」では、①問題をはっきりさせる　段階で、保育者が双方の対立を「能動的に聞き」相手に伝える事で、対立は解消する事が解った。言葉で自分の思いを十分に言い表せない2歳児では、表情で解る。そして、行動が変わってくる。今年度の当園のクラスは、担任保育者が、「今年はあまり大きな『けんか』をする子はないのです。みんなよく落ち着いて遊びます。」と報告している通りであった。

【今後への展開】

・保育者達は、「親業訓練協会」の人間関係の絆をつくる方法を身につけ実践している事がわかる。保育者の行動、安定した子どもの理解の方法を子ども達は見習って園生活を送っていると思う。　心が平穏であれば、行動にあらわれ保育者、子ども達相互に影響し合い暖かい信頼に満ちた人間関係を創り上げていくと思う。保育者は、はじめの目的であげた、『聞く』『話す』『対立を解く』の方法を身につけ、保育を展開し「平和」を創りあげていく基本を幼児期に育てていきたいものだと思う。

NII-Electronic Library Service